邪神の呼び声体験版

淫虐に沈んだ生贄の悲哀と慟哭

……じゅるじゅるという不快で耳障りな音がして、膿と粘液の汁を滴らせながら、「神」の身体から生えている無数の触手の群れアニタに向かって迫ってきた。ゆっくりと、ゆっくりと、宙空でゆらゆらと蠢きながら、距離を縮めてくる。

それらを目の前にしてアニタの顔面が恐怖で引きつった。困惑の極み、惑乱の極み、取り乱し、髪を振り乱し、発狂したような惨状でアニタは絶叫した。

「い、いやあぁぁぁ

そんな生贄の様子を愉しそうに眺めやりながら、「神」が触手をどんどんと伸ばしてくる。
近づく触手の一本がアニタの頬に触れたのは、嘔吐から数秒の時間が経過した時であった。べちゃっという湿り気を帯びた音がして、アニタの白い頬に、膿状の粘液がべったりと付着して、彼女は顔面を嫌悪と恐怖で引きつらせた。
「ひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃッ！　いやッ、いやッ、いやあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁッ！　こ、来ないでッ、おおおお願いだからッ、こっちに来ないでえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッッッ！」
怯えた声で懇願するアニタ。歯がカチカチと音を立てて鳴っており、身体がガタガタと震えて黄金の鎖がじゃらじゃらと金属音を響かせる。全身全霊でもって嫌悪感を露にするアニタだが、触手の進攻は止まらない。
最初に頬に触れた一本を皮切りに、海洋性軟体動物を彷彿とさせる触手の群れが、次々とアニタの身体に届き、その肉体に触れ、膿状粘液を分泌して塗りたくりながら、その白い肌の上を這いずりはじめた。
「ひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ

くりながら、アニタの細くしなやかな腕に巻きつき、太腿や股の柔肉の感触を愉しみながら、尻の肉を掴むように撫でまわし、まるで果実をむしり取るように大きな乳房を揉みしだく。最初から強い力を込めて、まるで肉の品質を確かめるように、ゆっくりと、ゆっくりと、丹念に、丁寧に、生贄として捧げられたアニタの肉を堪能しているようだ。

その間、ジュッ、ジュッ、ジュゥゥゥッ、という音がして、膿状粘液に侵された薄い布地が溶けていたのだが、アニタは触手の恥辱に耐えることに精一杯でそんなことに気を向けている余裕がなかった。

そのため、肌が徐々に露になっていき、大きな乳房も、先端の薄桃色の乳首も、肉付きも形もよい大きな尻も、まだ毛が生えていないアソコも、何もかもが丸見えの状態になってしまっていても、気を向ける余裕がなく、背けた顔に全霊の嫌悪感を湛えるだけで精一杯であった。

「い、いやぁぁぁ

いでぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッ！」
性的な快感が身体の内側から込み上げてきたのか、若干、頬を紅く染めながら、歯を食いしばり、自分を凌辱する触手に向かって頼み込む。しかし「神」が生贄の頼みごとなどに聞く耳を持つはずがなかった。
別の触手が肉付きのよい尻を掴むと、それを揉みしだきながら、あろうことか左右に拡げたのだ。その結果、キュッと閉まった肛門に洞窟内の冷たい空気が直に触れ、アニタは目を見開いて小動物のような悲鳴を上げた。
「ひぃやあッ、だ、ダメッ、そ、そそそんなとこ、いじっちゃダメぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇッッッ！」
しかし「神」はアニタに対する愛撫をやめようとはしなかった。
無数の触手をアニタの肢体に絡みつかせ、その身体をじゅるじゅるの薄汚い粘液で穢しながら、まさぐり、弄び、丹念に、丁寧に、あるいは力強く、まるで舌で舐めて味わうように揉みしだきながら、アニタの嫌がる素振りを愉しむかのように蹂躙を続ける。その間、「神」の巨大な口からは、愉しげな「音」が「声」のように漏れ響いていた。
「ウガアアアアアアアアアアアア、ウガアアアアアアアアアアア、イア、ウガアアアアアアアアアアア

悪臭を放つ触手に首筋を撫でまわされながら、アニタは涙を流して、助けを求めるような声で悲哀の声を発した。

「い、いやあぁぁぁあぁぁあぁぁあぁぁぁぁぁぁ……ッ！　お、お願いだからッ、おおおお願いだから……もう、これ以上、酷いことしないでぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ……」

無駄だと知りつつも、懇願せずにはいられない。その声は、処理される家畜のような、トドメを刺される獣のような、哀れで悲しみを誘う声であった。

その声を「神」は愉しそうに聞いていた。

そして――――。

ガギンッ、ゴギンッ、ガチャッ！

鈍い金属音が鳴り響いて、アニタの身体を拘束していた黄金の鎖が引き千切られた。だからと言って、アニタが自由になったわけではなかった。黄金の鎖の代わりに、今度はアニタの身体に巻きついている触手たちがその自由を奪って、アニタの身体をゆっくりと宙空へと吊り上げはじめたではないか。

「ひ、ひっ、はひいィいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいィィ……ッ！」

足が地面から離れ、身体が浮かびあがるという、人生初の体験が、アニタの心を鋭い爪で掻き毟った。

触手に吊り上げられて、アニタの身体がどんどんと上昇してゆく。上へ上へと昇ってゆく。眼下に見下ろす祭壇が小さくなって、祈りを捧げる神官たちが米粒のように見えるほど高く吊り上げられて、アニタは恐怖で瞳を大きく見開いた。

その宝石のように美しい瞳に、すぐ目の前まで迫ったおぞましく醜悪な「神」の姿が大きく映り込んだ時、アニタの口から、本能と魂が直に発する、この世のありとあらゆる狂気を孕んだ金属めいた悲鳴がほとばしった。

「ひイイヤあぁあアァぁあぁあアあぁあアァぁあアあぁあアァぁあアあぁあアァ